
MOON-4 夜叉 4 < 3 2 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 < 3 2 >

【Nコード】

N 4 2 0 5 N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

『あの夜』、帝王 和人はもう一人の帝王 九桜を倒す事が出来なかった。それは2人を繋ぐ強い血 - - 運命が、また新たな方向へ動き出す。

MOON - 4 夜叉 4 第2章第4話です。

2・月夜（がつや） - 4（前書き）

もう8月も終わりですね！。

2・月夜（がつや） - 4

和人は桜の攻撃の仕方に疑問を持ち始めていた。
京王デパートから新宿大通りへ。

（同じだ。あの夜と。）

そう、それは九桜と闘った時と同じ攻撃。

ALTAの前で、桜を追う和人は左手を振り上げた。

バツ・・・

青白い閃光が桜の胸元めがけて夜の闇を走る。

桜は振り返り、両手を広げた。

花卉の嵐。

その『壁』は、和人の一撃を闇に消えうせさせた。

それを見つめ、桜が微笑む。

「貴方に私を倒せやしないわ。」

「何だと。」

和人は目を細めて、桜を見つめた。

桜は、

「だって、貴方、九桜を倒せなかったじゃない。」

「！・・・」

和人の表情に翳りが走る。

「貴方なんて嫌い。」

桜は右手を上げた。「九桜も秀も、私が欲しかったものの全部とちやうだから。」

紅の閃光が和人めがけて走る。

和人は難なくよけ、桜の頭上に舞いあがった。

「ふふ・・・」

桜はあどけなく微笑み、「思い出してよ、あの夜の出来事。」

「何？」

桜を追いながら紀伊国屋ビルに向かう和人。

「貴方何故九桜を倒せなかったか……その記憶を自分で『封印』してるのよ。」

「そんな事ない！」

和人はそう叫び、左手を上げる。

同じ様に、桜も右手を上げた。

（同じだ……）

青白い炎を放ちながら、和人は、

（あの夜もここで……）

和人の閃光の方が先に桜へ辿り着いた。

一瞬、目の前が光の渦に巻き込まれる。

（そう、そして……）

和人は思った。

ソノ ナカ カラ……

「ふふ……」

桜が姿を現した。

ビリジアン・ブルーと金色を混ぜた色の瞳を持って。

「お前は誰だ。」

和人は言った。

「私は私よ。」

「私は私だよ。」

少女の幼い声と青年の澄んだ声……

「……」

（まさか、九桜！？）

「やっと気付いてくれたようね。」

和人の表情を見届け、桜はにっこりと笑って言った。
そして、両手を広げる。

再び、花弁が夜の新宿に広がる。
「・・・・・・・・」

ダンッ

とても少女のものとは思えない力で、和人は紀伊国屋のビルの側壁に叩きつけられた。

その時、地上に秀と裕希が降り立った。

「和人っ！」

裕希が叫ぶ。そして、その傍らには夜叉の姿。

「来るな！」

和人は叫んだ。

「貴方の大切な人たちでしょ？」

「君の大切な人たちだろ？」

少女と青年の入り混じった声。

「和人っ！」

秀は地を蹴り、彼の元へ行こうとした。
が、

「邪魔になるだけだよ、秀。」

行く手を榊に遮られた。「お前の相手は俺がする。」

「どうして逃げなかったんだ！」

秀は叫んだ。「桜の中にはもう一人、誰かが……九桜がいる。

そのアンバランスな精神の状態で九桜が『復活』したらどうする！

桜は『崩壊』するぞ！」

「和人を倒せば」

榊は言った。「帝王の血を受け継がなければそれはありえない。」

「・・・・・・・・」

「そう簡単に帝王の血を渡すと思うか？」

「・・・・・・・・相手は九桜だぞ。」

「だから、先に帝王……和人を倒すのさ。」

柷は身を翻した。

「柚っ！」

彼の後を秀は追った。

「一体、どうなってるの？」

裕希は飛翔した榊と秀の姿を見つめ、
「桜の中に二つの『存在』」
・

・
・
・
・
・
」
時折放つ無数の光。

「まさか。」

「九桜は桜の樹の下に眠っている。」

「……そうだったんだ！」

一度だけ見た夢。

桜の花びらに埋もれ横たわる青年とそれをじっと見つめる青年。

「ここに來るべきじゃなかつたんだ。」

翡翠色の瞳の青年 - - 和人の台詞。

「もしかして」

裕希は目を見開いた。「俺が和人の『運命』を変える？」

だしたら。

本当に九桜が桜の中にいるのなら、それに和人が気付いてしまつたら・・・

（和人は九桜を倒せない！）

「夜叉ッ！」

裕希は傍らの夜叉に向かって、「俺を和人の所へ連れて行って！」

夜叉は微笑み、

「承知。」

「『記憶』を封印したようだね。」

大人びた口調――むしろ青年と考える声で、桜は和人を壁に押

し付けて言った。

「何故、お前が桜の中に。」

「桜は私の直系だった。しかし、私を愛するあまり、私の近親者を皆殺しにし、私の手で『桜』の樹の下に封印したのだよ。」

「・・・・・・」

「君はあの夜、私を倒しきれず封印されている桜の元に私を運んで、眠らせた。そして、お前は秀を選び、秀と同じ位血の強い^{エナジー}榊が桜の封印を解いたのさ。」

「・・・・・・」

「君にはまた、私を倒せない。」

その唇が、桜の唇が和人の首筋を狙う。

「そうはさせるか！」

「そうはさせないっ！」

秀と裕希の声が同時に夜空に響いた。

秀は榊を制し、裕希は夜叉の胸元に抱かれ、中空にいた。

「これ以上、和人を苦しめるな！」

裕希は叫んだ。

振り向く桜。

榊の姿を見つけ、

「榊！来てくれたのね。」

嬉しそうに微笑む。それから、もう一度、和人を振り返り、

「貴方なんかじゃない。」

その脇腹に、右手をのめり込ませた。

「つつ・・・・・・」

蹲る和人。地上に向かって血が滴り落ちる。

「させるかっ！」

和人は顔を上げ、左手を振り上げた。

バツ・・・・・・

青白い閃光が、桜のドレスの裾を焦がす。

「やったわね・・・！！」

桜の表情が変わる。「許さない！」

両手を広げ、桜の花弁を巻き起こそうとする。

しかし。

その両手を広げた瞬間、和人は桜の胸に閃光を放っていた。

「痛いじゃないの！」

桜はそう言い、和人の左手に2本の牙を立てた。

「！！・・・」

「和人っ！」

「和人っ！」

裕希と秀が同時に叫ぶ。

『帝王を甦らせるのは帝王の血。』

「つつ・・・」

和人は左手を抱きしめた。

「和人っ！」

彼の元へ行こうとする秀の背中へ榊の長く鋭く尖った爪が立てられた。

「！！・・・」

「お前を行かせやしない。」

闇に、榊の声が響き渡った。

そのまま榊は宙を蹴り、桜と和人の元へと向かった。

「何とかしなきゃ！」

裕希は夜叉に、「もっと近くへ飛んで、夜叉！」

「承知。」

夜叉は裕希を連れて、光の中心部へと向かった。

2・月夜（がつや） - 4（後書き）

いよいよ、本当のクライマックスです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4205n/>

MOON-4 夜叉 4 < 3 2 >

2010年10月9日13時02分発行